

(九一名)となつてきている。かくの如く發展してきた生化学(農学部では鈴木梅太郎以来生物化学の名前が使われている)も医学部においては医師養成の面から考え、今後如何にすすめるべきかは当然この歴史の上に展開されていかねばならないが、米国ハーバーの生化学教科書も一九八一年の八版からは生理化学から生化学に変わつてきている。今後生化学をふくめて基礎医学教育のあり方が検討し直されるべきであらう(現在医学部以外からきている研究者のなかには日本生化学会が日本医学会の分科会であることをしらないものも出てきている)。

(文献)・日本医史学雑誌二六(三)三一〇~三二二(一九八〇)柴田幸雄。

医化学から生化学へ、ケンブリッジ大学医史学モノグラフィ、コーラー。

(愛知医科大学生化学教室)

ディオスクリデス・

「ウィーン写本」

大槻 真一郎

一、薬物学上のディオスクリデスの業績

ディオスクリデス(日本では一般にディオスコリデスとして伝わっている)は、紀元一世紀にローマで名声を博した薬物学者で、当時のローマ皇帝ネロのもとで軍医をつとめたといわれ、各地を旅して見聞をひろめたが、特に薬物分野での研究がすぐれていた。二世紀以後、西洋の医学を千数百年にわたつて支配したガレノスが、ディオスクリデスのことをきわめて賞讃していることから、彼が並々ならぬ人物であつたことは疑いない。小アジアのキリキア地方に生まれ、当時の学問の都であつたペルガモンとアレクサンドリアで学んだが、たくましい天性の知恵はローマで大きく花を開き、彼の後の千五百年間以上、薬物学分野の最も偉大な金字塔的存在として仰がれることになった。

ディオスクリデスは、五巻本の『薬物書』を紀元一世紀にギリシア語で書いた。これは、すぐれた先人たちのものを完全にしのいでおり、それまで例えば薬用植物の分類が形式的にアルファベット順であったり外見的な類似で行なわれていたものを、彼が機能的に分類を行なったことで知られている。しかしその後の写本は、彼の原典本来のものと、従来の便宜的アルファベット形式の二つの系統によって今日に伝わっている。

二、「ウィーン写本」の由来と今日に至る経緯

ディオスクリデスの『薬物書』（図葉は一切なし）五巻とは別に、植物主体の美しい彩色図葉をもった薬物学のギリシア語写本がある。これが、その保管場所になんで一般には“Wiener Dioskurides”（ウィーンのディオスクリデス）、ラテン語で正式には“Codex Vindobonensis, Medicus Graecus I”¹⁾といわれるもので、その出所からは“Dioscurides Constantinopolitanus”（コンスタンティノポリスのディオスクリデス）と呼ばれ、オーストリア国立図書館「ギリシア医学写本一」という図書番号をもった手書きの集成本であり、その書体と図からみて、一つの製作所で作られたことが

わかる。

「ウィーン写本」は、第六葉に描かれた献呈図からすると、六世紀の最初の十年間に、ビザンチンの王女アナキア・ユリアーナが、ホノラータエに教会を建てたことに対する感謝のしるしとして、その市民たちがこの書を王女に捧げたのだということになる。ユリアーナ以後一千年余り、この書物は、きわめて数奇な運命をたどり、転々と所をかえてラテン人やトルコ人やユダヤ人の手にわたったが、その間いろいろと複製も行なわれたようである。が結局、「ウィーン写本」原本は、随分破損を受けたとはいえ、当時スルタンだったソレイモン二世の侍医ユダヤ人ハモンの息子から、オーストリア皇帝マクシミリアン二世が一五六九年に買い取るところとなり、きわめて高価なこの古写本自体は、ウィーンの宮廷図書館に、さらにオーストリア国立図書館に所蔵されることになって今日に至った。

三、「ウィーン写本」の内容と評価

写本は六つのグループに分れる。第一グループ（二一―三八七葉、vは図葉のウラ頁）には薬用植物三八三種がアルファベット順に並べられている。内容は大部分が前掲のデ

イオスクリデスの『薬物書』に由来し、薬草の名前のリストが掲げられ、医学的な作用や処方の説明が行なわれている。以上が写本の主要部分である。第二グループ（三八八—三九二葉）には「神に浄められた植物の力についての詩」があるが、作者は不詳。第三グループ（三九三—四三七葉）にはニカンドロス（前二世紀）の「蛇の毒に対する薬」（テリアカ）に対するエウテクニオスの解説がある。第四グループ（四三八—四五九葉）も、ニカンドロスの「食中毒の薬」という詩に対するエウテクニオスの解説がのせられている。第五グループ（四六〇—四七三葉）には、ギリシアの教訓詩人オッピアノス（二—三世紀）の「魚撈の詩」についての無名氏の解説がある。第六グループ（一vと四七四—四八五葉）にはディオニシオスなる人の「鳥と鳥捕獲についての詩」の解説と二十三の鳥の絵があり、最後に六葉の羊皮紙の付録（四八六—四九一葉）がついている。実はこれは一四〇六年に古写本を新纂するとき付け加えられたものだが、これは紙面の関係上ここでは割愛しておきたい。

ところで「ウィーン写本」には、紀元六世紀のビザンチン、特に貴婦人たちの間に薬用植物の図葉愛好者が多かつ

たこと、しかも分類は便宜的なアルファベット順に行なわれていること、さらにマンドラゴラの図に見られるように、ディオスクリデス本来の経験実証的な生薬研究がだんだん神秘的宗教的霊薬を求める方に向っている傾向からすると、本来の道からの逸脱の様子がわかるが、それにしても当時におけるディオスクリデスの並々ならぬ評価とビザンチン美術の一環を示す写本の歴史上の意味は、依然超一級の評価を受けるに値すると考える次第である。

（明治薬科大学）